清沢満之は生きている

鈴木大拙

1

大体、私は、清沢さんと同時代になるわけですが、ところで、去年は、仏教がアメリカへ渡ってから、七十年たつというのですね。七十年前といえば、明治二十六年ですが、その頃、シカゴに、宗教大会があった。シカゴで、世界の博覧会をやって、そのついでに世界宗教大会というものを開いたことがあるんです。

その宗教大会を開くときに――ちょっと余談のようですけど〝キリスト教は、世界無比の宗教なんだが、他の宗教を自分らと同列において、そして大会を開くなんていう間違った考えには、不賛成である〟というような議論があったそうです。ですから、その頃を今日からみるというと、七十年の時代の違いというものが感じられるですね。

ローマ法王のヨハネス二十三世も、つい先日（六月四日）なくなられたが、あのヨハネス二十三世も、去年は、仏教代表者とバチカンで会見して〝今日のように不安な時代には、宗教が、みな手をつないで、世界の平和、人間の幸福のために働かねばならぬ〟といわれたということですが、それと七十年前と比べると、大変な違いになっておるですね。

かつて、グリフィス W. E. Griffis という人の書いた "The Mikado's Enpire" という本をみたことがありますが、そこでは〝仏教は、偶像崇拝だ〟といっておる。そうして、その頃は〝ああいう偶像教は、倒してしまわないと駄目だ〟というくらいになっておったですね。それが、今日になってみるというと、大変な違いで、今日では、仏教を偶像教だといって排斥するものは――少くとも、キリスト教の間にはないだろうと思います。今年、カソリックの人が書いた本で "Zen-Catholicism" というのが出ておる。それから、去年だったか一昨年だったか、出た本の中に "Christian yoga" というのがある。

近頃、ヨーロッパでは――日本にも入ってきておるが――yoga の話が流行っているのです。殊に、その中でも、体を、色々、あっちまげ、こっちまげしてやるのが流行っている。その本も、ある程度 yoga をキリスト教の方にとり入れなければいけないということで、Christian yoga ということをいっておる。それから "Zen-Catholicism" という本も、禅をとり入れる、何も仏教的に観念をして冥想に耽るという座禅でなくても、心を神に集中するというような点では、やっぱり座禅もやったらよかろうというようなことにまでなってきたですね。

Roman Catholic Church の方では、本を出すのが、仲々やかましくて、priest というような位階におる人は、上役の承認をうける、〝この本には誤りがないから、出してもいい〟という許可をえなければ出せないですね。いま申上げた二つの本のほかに、もう一つ、カソリックの坊さんの書いた本を、私は知っております。顔はみていないが、文通をして知っている人でありますが、その人なども、やはり免許を受けて出しておる。中には、立派な科学者で、免許を受けられないで、死後になって初めて出版せられた本もあります。大体、そういうことが、やかましいですね。

それから、キリスト教の、殊にカソリックの坊さんになるというと――私が、アメリカにおる時に、学校で、宗教の先生達が寄って、懇話会というか、茶話会のようなものを、時々やったのですが、その時に、何か質問を出しても〝それは、少し待ってくれ。家へ帰って相談して返事する〟というようなことなんですね。即座で、その人の意見と

しては出さないという位に、統制が行きとどいているというか、異安心を嫌うわけです。それで、ああいう大きな教団の思想的統制がとれておるとみえるですね。それが、善いことか悪いことか、わからんけれども、とにかく、そういうことになっているものが、今日、仏教を〝よかろう〟と寛容的にみるということは、隔世の感ありというか、この半世紀の間に、大分ものが変ってきておる。

2

ところで、私は、坊さん出の人間じゃないので、仏教には大分縁の遠い方であったのですけれども、その頃、私の師事しておった人が、宗教の大会へ出られるというので、何か書いたものを大会で読まねばならぬから、それを英語に飜訳せにゃならんということで、そういう相談を受けたことがあったです。

その時、清沢さんの『宗教哲学骸骨』という本を見たことがありますが、その内容は、どういうものであったか、覚えておりません。何でも〝宗教哲学の骸骨というのは、妙なものだな〟と思うておったことがあります。清沢さんは、その頃、そういうような本を書いた人の初めの一人じゃないでしょうか。宗教というものの全体に対して、まあ骸骨でも肉体でもかまわないが、とにかく、何か、そこへとり出して議論の題目にしたということは、その頃、はじめてじゃなかったでしょうか。その時、初めて先生の名を承ったが、直接には、お会いしたことはないのです。

それから、私は、外国へ行っておって、明治陛下のなくなられた年ですから、明治四十五年ですか、その年に帰ってきて、そして、今はなくなられた佐々木月樵君――あの佐々木君には、若い時から近づきで、多少知っておったのです。そうして、色々な真宗の本を訳すということになったのです。ちょうど、親鸞聖人の六百五十回忌の頃だったろうと思います。

その頃、暁烏敏君が、信仰の五部――じゃなかった、三部のように思うですけど、ポケットに入れていいような、

小さな本を印刷しておったです。それは『歎異抄』と『蓮如上人御一代記聞書』と『安心決定鈔』の三部のように覚えております。五部だとすると、まだ他に二つなくちゃならんが、その二つを覚えておらんから、きっと三部でしょう。――それを読んだですね。

私は、加賀の生れですから、真宗は最も盛んですし、真宗のお寺もよく知っておる。ところが『歎異抄』や『安心決定鈔』『蓮如上人御一代記聞書』を読んで、〝これなら真宗というものも、ただ極楽詣りをいうだけのものじゃない、面白いな〟ということを、佐々木君に話したことがあるんです。それを読んで、そして真宗に対して、一段の興味をもつということになったです。

近頃、『歎異抄』を、こちらの新門様が訳されたので、色々評判にもなっているようでありますが、その中に〝弥陀の願というものは、親鸞一人のためのものだ〟つまり、〝法蔵菩薩が修行せられたということも、自分一人のためであったか〟という言葉がある。この〝一人のためであったか〟という言葉――これが宗教の信仰の核心に触れたものだということを感じます。

3

それで、今日、清沢さんの思想について、何か知っておらんというと、あなた方の前に出て、何もいえんじゃ困ると思うて――いまの西谷（啓治）さんのお話も、一生懸命聞いてみたけど、私はもう耳が遠くなって、駄目ですね。それで、先生のお話と、何も連絡せぬかも知れませず――あっていいわけですけども――甚だ申訳ない次第ですけども、これはやむをえない。

さて、それで、時々、暁烏君にも話したことがあり、佐々木君とも話したが、清沢さんの『我が信念』という、なくなられる前に、お書きになったもの――それを読んだことがある。それも忘れておったのだが、今度、それを人か

らもらって読んでみたんです。実は、今日も、それを持ってこようと思って、ポケットへ入れたつもりだったけど、どこかにおいてきたらしい。年をとるというと、忘れることと聞えぬことと、眼がかすむということで、もう人間には役に立たぬので、ごめんを蒙るべきであるわけだが、まだ業が尽きん――というわけです。

その『我が信念』を読んでみたらば、無限ということと有限ということを書いてあるですね。皆さんも、お話を聞いたり、本を読んだりして、知っておられることだと思うが、あの頃に、ああいうことを真宗へもってきて、そうして、有限から無限に転ずる、あるいは有限から無限に横超すると申してよろしかろうが、無限絶対の他力によって、そうして、業にまかせて、今日ここに生き死にする自分、というようなことをいわれた。

その頃、宗教や哲学の本を読んだり、話を聞いたりしたことのなかに、シュライエルマッヘルは、〝絶対の憑依〟というか、〝絶対にたのむ〟〝絶対に自分の身をまかせてしまう〟ということが、宗教の本来の性格だというようなことをいっていたと覚えますが、清沢さんも、そういう点からお書きになったのかどうか知らぬが、〝絶対の他力〟ということをいわれるですね。その頃に、そういう具合に道破するということは、よっぽどの卓見であったろうと思います。

これは、卓見というよりも、むしろ、自分自身の身で、それを味わうということになるのが宗教である。だから、宗教では、それでもって、人間の全体が動かなければならぬ。人というか、人格というか、そういうものの全体が反応するのであるからして、見識だとか、哲学だとか、論理学だとか、心理学だとか、何とかかんとかいうようなことではいけないんだと、私は思うています。それは、どうしても全体が動かなくてはならぬ。その全体が動くというときに、宗教というものがいわれる。

だから、宗教に名をつけるというと、哲学がどうだとか、神学がどうだとか、というて、それが宗教に、どうなるんだとか、こうなるんだとか、いいますけども、その方の研究はそれでいいとして、我々自身からいいますと、そう

いうことは第二義で、これは哲学にあるのか神学にあるのか、または宗教学というものにあるのか、ないのか、わかっても、わからなくても、みんな、そのままにしておいて、そうして、この身このままが、何かにぶつかるということで、そこで名をつけて、宗教というものに体験せられる。——それを言葉の上に表わして、absolute dependence. これを、絶対に受け身であるというと、また弊が出てくると思うです。

4

清沢さんは、若くてなくなっておりますが、ああいう体質の人というものは、大体、頭が鋭いというか——私も、若い時に知っておる学校の友達で、仲々頭のいいのがありましたけれども、その人も、やはり同じような種類の病気でなくなっておる。ああいう体質の人は、一体に、気が急くというんですか、神経質になりやすいんでしょう。そこを〝ひょっ〟と踏み切ることができんということがあるんですね。

それで、私は、時々こう思うんです。昔、華厳の滝に飛び込んで死んだ人があるでしょう。〝天地の問題は、もういくら考えたってわからん。わからんから、もう死んでしまえ〟というわけで、華厳の滝へ飛び込んだ。わからんから死んでしまえでいいのか、わからんから生きておれとするのがいいのか、どっちがどっちかわからん——けど、その人は〝わからんから死んでしまえ——〟

ところが、華厳の滝なら華厳の滝——今は、十階・二十階と高いビルがあるが、そこから飛び降りるという時に、飛び降りる瞬間に、私は、何か〝ひょっ〟と、さとっておると思うんです。けども〝ちょっと、まて〟というわけにゆかんから、落ちて「さようなら」になってしまいます。

もし、偶然に、生きて戻ってきた人があれば、ちょうど極楽へ行ってきた話をするように、その話ができる。いまdecision ということを、やかましいうが、あの踏み切りが、哲学者にはできないんだ。そのところに立っておっ

て、さあ飛ぼうか飛ぶまいか、というておっちゃいけないんだ。やっぱり飛ばなきゃいけないんだ。飛ぶ時に――decision の瞬間に、何か横超という経験があるに決っておると思う。

そうでない人もある。皆がそうだというわけにはいかんけれども、そういうものが、かなり大勢あったんじゃないかと思う。それは、それでいいんでしょう。その人は極楽へ行っておるから、死んでもかまわんけれども、あとの人のために、また心理学者や宗教学者の学問のためにも、ちょっと生きておる機会が与えられるというと、面白いですけどね。しかし、そういう具合にはいかんだろう。

ともかく、それはそれとして、そういうふうに思い切るというのでなしに、ゆっくりと構えて、病いは病いとしておいて、それと相い対向してゆこうというような性格の人は、宗教的体験というものに、普通一般の人よりも、よっぽど深いものを持っておる。そういう点が、清沢さんにあったものとみてよかろうと思うですね。

昔から〝三十にして立つ、四十にして惑わず〟というが、三十と四十との間が、仲々大事なんですね。そして、人間は、四十前後になるというと、一人前の人間になるんです。〝四十、五十は分別ざかり〟といいます。まあ、その頃が、人間の働き時になるだろう。二十、三十時代の間は、何か、まだ考えが醗酵的な状態で、落着いていないのが、四十、五十になるというと、かたがついてくる。それから、四十、五十、六十、七十、八十になれば、そのかたが、段々に細部にわたって充実してくるようになるだろう。あなた達の大部分は、まだ四十にならぬとみれば、これからですね。

そういうふうで、清沢さんも、なくなった頃は、精神的成長の頂点に達せられたものだと思います。けれども、あれがもう一つ長生きせられて、私の年ぐらいになられたら、まだまだ面白いことがあったろうと思う。それが、そうでなかったということが、ある点からみれば惜しいというけれども、ある点からみれば、それでよかった、と、こうもいえるですね。

清沢さんの本にも〝何が善いのか、何が悪いのか、わからんのだ〟と書いてある。しかし、そういうけれども、何が善いか何が悪いかわからにゃ、今善いと思うていることを善いとしてもいいわけなんだね。何もわからなけりゃ、今善いというのを、それを善いと決めておけばいいわけですね。そして、それがわからんならば、やめてしまえばいい。

それじゃ、豹変して仕方がないが、『論語』にも「君子は器ならず」というが、ものがかたに入ったように決っていない。君子というものは変る。それで「君子の過や、人皆之を見る」というわけで、しくじったら、しくじったで何も隠す必要はない。しくじったとして、変えればいいじゃないか——そういうふうにもとれるですね。けれども、〝何が何だかわからんから、責任は皆、阿弥陀さまにまかせてしまう。私は、もう勝手次第にやる〟という具合にもいかんだろうと思う。

5

ところで、先に申上げたように、親鸞聖人は〝阿弥陀さまの願は、自分一人のためだ〟といわれる。その〝自分一人のため〟というところをみなけりゃならぬ。絶対他力ということは、弥陀の本願力の中に元来あるのだから、それに我々はまかせる——まかせるというのじゃなくして、絶対他力というものを、受け入れるというか受け取るというか——まかせるというと、全く受け身になるですね。人間は、何というても、絶対に受け身になるということはできんと思う。受けるというても、受ける何かがなけりゃならんですね。絶対他力というても、絶対他力というものが何か、ということですね。

それから、清沢さんの書かれたものをみても〝我が絶対他力をたのむんだ〟〝私が、こうなるのは弥陀の力によるんだ〟と、こういう具合に「我」というものを、どうしてもつけにゃならんですね。その「我」が、自力の「我」じ

ゃなくして、他力をいれる「我」ですね。それがなけりゃならぬ。それが〝我一人がためなりけり〟で、そこに一人ということをみる。何も、自分一人のためになればいいという意味じゃない。

それでお釈迦さまが「天上天下唯我独尊」といわれたという。それは、お釈迦さまがいわれたでも、いわれんでも、どっちでもいいんだが、そういうことを誰かがお釈迦さまのところへ持って行って、お釈迦さまにいわせるようにしたということは、我々のもっておる宗教的体験の深いところから出ておるですね。その「我」をみることが大事だろうと思うです。

近頃「他力」ということを、あきらめるというが、あきらめるでは駄目で、あきらめるといえば消極的な態度になってしまって、そこに一人というものが出てこない。それで、動物の世界とか植物の世界、木なら木、猫なら猫というもの――たとえば松が生えるときに〝私は松だから、松に生えるんだぞ〟〝私は竹だから、竹になるんだぞ〟と、こういって、すーッ、すーッと延びてゆくというが、私らからいうと、そういうことをいうんだが、竹自身からすれば〝私は竹だから――〟とも何ともいわない。なるようになってゆく――と、こうなるですね。

ところが〝私は竹で松じゃない〟竹は竹で松じゃないと、竹と松とを区別するのと〝私は竹だ〟というだけなのと違う。松は松、竹は竹だけで、松ともいわず竹ともいわずに、ずーッと延びてゆく――そこに、松が松と自覚し、竹が竹と自覚するものが出てくるんですね。松をのけておいて、松から区別して、竹が竹というての自覚でなくして、竹自身が竹と自覚するんですね。そういうことはあり得ないというても、しかし、そういうことは、実際にあり得るんだ。

理屈からいうと、あり得ない。松は、竹と対するか、山と対するかしないと、松といわれんが、そうでなしに、松が松として、何も他のものに関係しないで〝ああ〟というて自覚する場合がある。その自覚を、宗教的な体験といいたい。それが自分一人。それを自覚することができる。その自分というものを、ほかから離して自覚するんじゃない。

その自分を自分だという具合に自覚する。そういう自分というものを、絶対の自分というてよいか、絶対の他力というてよいか。そこに宗教というものがあるのであって、それを考えておかねばならんと思うです。

近頃、仏教が、西洋の人に、よく話されるといいますが、西洋人の話を聞くと〝私らは、君ら東洋人のようなあんばいに、ものに全体にまかせるとか、そのままに、あなたまかせにはできない〟と、いいますですね。〝私らは、どうしても自分というものを考えて、そうして、それによって自分の責任とか、自分の道徳とか、善し悪しということを決めてかからぬというと、君ら東洋人のようにはゆかぬ〟という。それが、西洋人一般の心理だろうと思う。

それは、それでいいんだが、その時の自分というもの、いわゆる相対的な基礎に立っていう自分の出どこが、どこにあるかだね。その、出たところでなしに、その出るまでのところを考えてみなければならぬじゃないか。そこに、人間の人というものが出てくる。人間の全体性というか――人間の全体がどうだとか、部分がどうだとかというと、面倒になるが――いくら面倒になっても、この面倒になることを面倒とみて、それを嫌がらないでおいて、また、ちゃんと、その元のところをみておるというと、何をいうても、理屈いうて騒いでおっても、何でもかまわぬようになるのです。

それをみて、その点から〝我一人のためなりけり〟といわれた、と、こう私は考えたい。それを、ただ「絶対他力」という場合には、それを見誤りはしないか。見誤るということは、ただ見損うということじゃなくて、それに気がつかずにいやしないか。〝自分一人のためなりけり〟という、この自分は、どこから来たか。この自分を、西洋風の一人の自分と考えると、その自分は、相対の世界へ出て、あれとこれと分けて「我」ということになるのだが、そういう自分でなくして、それを出させる元に、もう一つ突っ込んでゆくというと、本当の「我」がわかると思うです。

6

これは、いわゆる大乗仏教の人は、余りやかましくいわぬようだけれども、『法句経』の中に、お釈迦さまが、さとりを開かれた時にいわれた偈頌が出ておるですね。あれは、一五三と一五四の二つの gāthā だと思います。

それは〝自分は、もう何度も生れかわり、死にかわりして、この世へ出てきて、そうして輪廻をした。輪廻をしてお前を探したけれども、そのお前がみつからなかったが、今度こそは、お前を掴まえたぞ〟と。そのお前というのは「我」ということですね。〝自分というものの家をこしらえた、大工の棟梁をみつけたぞ〟と。〝お前は、これから今までのように、色々な家を――分別の世界を作りあげて、私の本当の成道を妨げないようになったぞ〟

この後の一句が大事だと思う。それは、漢訳では、どうだったか――それから、友松さんの訳したのも、どうだったか、忘れてしまったけれども――もとのパーリ語では――私は、パーリ語は余り上手じゃないから、駄目だけれども、それに "visaṁkhāragataṁ cittaṁ tanhānaṁ khayaṁ ajjhagā'ti." とある。visaṁkhāragataṁ というのは、saṁkhāra は、ものがよってできておる。とこうする。とそれが諸行無常の行ですね。その行が vi-saṁkhāra で、解散してしまって、分裂してしまって、そして gataṁ――そうなったということですね。cittaṁ は心です。つまり心が固って何かできておるものが、ばらりと落ちたということですね。それは恰度、道元禅師が支那へ行って、如浄禅師のところでさとりを開かれた時に「身心脱落、脱落身心」ということがあった。その身心脱落に、そっくりあたるんですね。

それから、tanhānaṁ khayaṁ ajjhagā'ti. それは、煩悩というか、貪欲というか、tanhā が、もうなくなってしまったということですね。それで枯木寒岩のようになって、何もなくなってしまったという意味にとってきちゃならんですね。いわゆる我というものを主にした煩悩はなくなるけれども、仏としての煩悩は、ちゃんとあるわけだ。

それを今日の言葉になおしていうと、それは、菩薩が涅槃へ入って仏になってしまったということじゃない。菩薩が、仏の正覚を成就して涅槃へ入らずに、しばらく菩薩にとどまって、そうして衆生のために用らく。菩薩は、涅槃へ入らないで、ここで、こうして我々の中で用らいてござるということが、仏教の大事な思想の一つですね。それが大事なんで、仏というものになったら、もう我々には関係なしというてよい。我々の考えじゃ、仏と菩薩との間の関係が余りはっきりせず、また、それを押して考えた人があるかないか。多分あると思いますけれども——菩薩は、涅槃に入らぬ、仏にならぬということになると、我々は、みんな仏で、そして、みんな菩薩だといえるですね。

自分自身は凡夫だと思っている。あなた方自身は凡夫だというていても、私からみるというと、みな仏さま、みな菩薩である——と、こういえる。そうするというと、私は、あなた方から、仏になる——とはいわれない。それは別問題だけれども、私からみるというと、みんな仏さま、菩薩さまというわけなんだ。そういうことになってくると、それがみんな、いわゆる身心脱落で、みんななくなってしまって、伽藍洞になったというようなことと思うと大変だね。

伽藍洞になったというなら、その伽藍洞がまたなくならなきゃいかん。伽藍洞になったという、そのなった伽藍洞を残しているかぎり、人間はまだ駄目だ。こういうものがなくなるというと、我は我、君は君、松は松、竹は竹、ということになってくるわけなんですね。そうするというと、極楽が娑婆で、娑婆が極楽ということになる。

とにかく、一切衆生みな如来の智慧徳相があって、そうして成道する、というようなことでなしに、いまいう『法句経』の一五三と一五四の偈にあるところの gahakāra ——我のこと、大工の棟梁のことをいうですね。あれを読んでみるというと仲々面白い。

それが消極的にならないで、みんな壊れた、みんなちらばらになってしまった、というのじゃなくして、ちらばらになったこと、そのことが、肯定なんですね。それを消極的にみないで、ちらばらになったというそこに、ちゃんと

絶対肯定ができあがるですね。その絶対肯定ができあがったところに、いわゆる人間が totality として出る。

7

それから、大慈と大悲というものは、仏教の二本の柱だが、その柱は、大慈と大悲が一つになって、その totality になったものが、そのままで、大慈でもなし、大悲でもなしに、動いて出るんですね。それが一番大事。それを絶対肯定というてよし、絶対他力というてよかろう。

何時も申上げるように、妙好人の浅原才一の書いたものの中に「他力には、自力もなし、他力もなし。ただ一面の他力なり。なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」というのがあるですね。浅原才一という人は、学問もなくて、僅かに〝いろは〟を書いた人であるが、その人がいうんだから、ますます面白いですね。いろんな説教者の話を聞いておるに決ってるんだ。けれども、説教者のことじゃなくして、自分の体験の中から出てきて「他力には、自力もなし、他力もなし。ただ一面の他力なり」。この一面ということは、絶対ということですね。そういうておいて「なむあみだぶつなむあみだぶつ」と書いておるですね。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」ということが、才一の本には、やたらに出てくる。紙一枚ほども「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」と書いておるですね。それは、ただ南無阿弥陀仏ということなんだろうかと、私は思うておったけれども、そうじゃなくして、自分が南無阿弥陀仏そのものになっておるんですね。それを、南無阿弥陀仏がそうだとはいわない。そういえば、私がいうようになってしまって、とるにたらん。それが「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」というて、南無阿弥陀仏自身になって、そこへ他力がちゃんと出ておるですね。

自分が弥陀か、弥陀が自分かわからんが、それであって、弥陀は弥陀、自分は自分。下駄を削っておる時に、弥陀が削っておるのか、私が削っておるのか、わからんが、とにかく才一が削っておる。自分というものが絶対他力で、

そうして、そこに自分というものが出ておる。そこに、清沢先生の人間全体が動いておる。こういいたいですね。私は〝清沢先生は、まだ生きていらっしゃる〟という題を出したが、そこに先生は生きていらっしゃるということがいえると思うです。

そこで、あなた方が、人々皆（にんにん）な生きてきたところの南無阿弥陀仏になってゆかんというと、これからの仏教全体がどうなるかと思われるですね。いまのように随自意で行ったら、もう仏教というものは、一〇〇年も経たぬうちになくなってしまうだろう。なくなってもかまやしないんだが、そうしては人間の全体の損になる。それで、西洋の人も世界全体が、皆な仏教者になれというわけじゃない。仏教がわかってくれて、そうして、そこに自分自身の信仰というものを確立させるようなものが、なくちゃならんと思うですね。では、今日は、これで失礼します。

（本稿は昭和三十八年六月六日、大谷大学における記念講演の筆録を古田紹欽先生に加筆訂正していただいたものである。文責　伊東慈明）